

日本語政策学会ニューズレター

Japanese Association for Language Policy SEPTEMBER 2023

2023年9月4日発行
第37号

この号の内容

1. 第25回大会報告
2. 2022年度学会賞報告
3. 若手研究者紹介
4. 2023年度特定課題研究会について
5. 会員著作物紹介
6. 事務局からのお知らせ
※JALP 特別企画 言語政策と「空間デザイン」シンポジウムのお知らせ
★編集後記

発行：日本語政策学会

〒279-8550 千葉県浦安市明海1丁目
明海大学 今千春研究室気付

E-mail: jalp.jimu@gmail.com

URL: <http://jalp.jp/wp/>

1. 第25回研究大会報告

大会委員長 齋藤伸子(桜美林大学)

6月17日(土)、18日(日)、麗澤大学において第25回研究大会が開催されました。大会テーマは『言語政策と「空間デザイン」』です。

対面開催(WiPセッションのみオンライン)で、参加者数は152名(会員121名、非会員31名)。大変活気のある2日間となりました。

1日目は、開会式、基調共演、シンポジウムが行われました。

2日目は、会員による発表、学会賞授賞式、総会が行われました。発表の内訳は、WiPセッション6件、口頭発表20件、ポスター発表2件、パネル発表3件です。学会賞授賞式および総会には多くの方に参加いただき、総会では質疑応答も活発におこなわれました。

基調講演とシンポジウムの内容は以下の通りです。

◎基調講演「『今こそ、集合知』で広がったバーチャルとリアルの世界～教材配信サイト Teach U の取組～」後藤匡敬(熊本大学教育学部附属特別支援学校)

◎シンポジウム 言語政策と「空間デザイン」

「言語・コミュニケーション研究からの「まちづくり」—2つの事例から考える」村田和代(龍谷大学)

「保育の場におけるかかわりあいと対話のデザイン—茨城県つくば市のフィールド調査から」井出里咲子(筑波大学)

「国フェスにおける多言語の調整と共存—駅前広場開催のベトナムフェスティバルの事例から」猿橋順子(青山学院大学)

1. 第25回
研究大会
報告

ディスカッサント:岡本能里子(東京国際大学)

司会:山川和彦(麗澤大学)

大会終了後の参加者アンケートによると、関東54.1%、東海・近畿37.%ほか海外を含む様々な地域からの参加者があり、関心の高さがうかがわれました。

参加者のみなさまおよび会員・関係各位に感謝しております。

2. 2022年度学会賞報告

2. 2022年度
学会賞報告

第24回研究大会(2022年6月)での研究発表、および学会誌『言語政策』第18号(2022年3月発行)掲載の研究論文について、学会賞選考委員会ならびに理事会の慎重な審議により発表賞の受賞が決定し、第25回研究大会で表彰式が行われ、表彰状が授与されました。

<発表賞(口頭発表部門)>

受賞者:西島順子さん(大分大学)

発表タイトル:イタリアの言語教育における複言語主義の変遷—イタリア人生徒と移民生徒の教育政策のなかで—

講評:

西島氏の口頭発表は、イタリアで1975年に提言された「民主的言語教育」が、その後、欧州評議会の複言語主義と結びついて plurilinguismo の新たな概念を構成していることを、言語学者デ・マウロが果たした役割の分析と共に歴史的変遷から明らかにしたものである。

そもそも、イタリアでは1970年代当時、言語格差に起因する教育・社会格差が存在していたことから、それらを是正するため、方言や少数言語などの複数言語を学校教育で承認するように言語教育改革が進められた。それを、1970年代後半以降の各段階における法律の改正や教育課程の改革などを分析することで、西島氏は現行(2012年~)の「カリキュラムのための国家方針」につながるものとして明らかにした。ただし、一連の改革は当初はあくまでもイタリア人生徒のためのものであったという。それが、1980年代以降に移民が急増すると、1989年には移民生徒の存在を考慮した法律「義務教育への外国人の受け入れ」が公布され、その後、複雑化する移民生徒の現状に即した教育が進められた。この過程においては欧州評議会の「ガイド」の草案が参照されるなど、欧州評議会の政策受容が見られることを指摘している。改革の途上においては、デ・マウロが言語学者としてだけ

2. 2022年度
学会賞報告

でなく政治家としても大きな役割を果たしたことも述べられており、言語政策研究として深い考察となっている点が高く評価できる。

発表当日も、ダウンロード可能な資料の提示に加え、発表態度や質問者への応答などでも優れた能力を発揮しており、発表賞(口頭発表部門)の受賞者にふさわしいと判断した。

発表賞(ポスター発表部門)

受賞者なし。

学会誌『言語政策』第18号 優秀論文賞

受賞者なし。

【発表賞(口頭発表部門)受賞者の声】 西島順子(大分大学)

この度は第24回研究大会の発表賞にご選出いただき、大変光栄に存じます。先日の大会で賞状を受け取った際、これまでご支援やご協力をいただいた多くの方々のお顔が思い浮かび、改めて感謝の気持ちが溢れました。審査にあたっていただいた選考委員の先生方も含め、この場をお借りして、皆様にお礼申し上げます。

本発表は、1975年にイタリアで提唱された plurilinguismo を包摂する「民主的言語教育」と称する言語教育改革が、今日までどのような変遷をたどり、欧州評議会の複言語主義といかに融合しているか、法律や政策文書をもって明らかにしました。イタリアも他のヨーロッパ諸国同様、言語教育政策には欧州評議会の複言語主義の影響を受けています。しかし、今回の研究で、現行の教育課程『国家方針』の「イタリア語」科目、つまり母語教育の到達目標に民主的言語教育の plurilinguismo が継承されていることが明らかになりました。また、その背景に民主的言語教育を提唱した言語学者デ・マウロの長年にわたる政治的な働きかけがあったこともわかりました。それらを解明した時、デ・マウロの一貫した信念と行動に、胸が熱くなるほどでした。

このような驚きと発見のあった本研究を貴学会で認めていただいたことは、何よりも嬉しいことでした。これを糧に今後も研鑽を重ねてまいりたいと思います。

なお、本研究は『複言語教育の探求と実践』(西山教行・大山万容編, 2023, くろしお出版)の第5章「イタリアの言語教育政策に見る plurilinguismo と複言語主義—イタリア人生徒と外国人生徒の教育政策

2. 2022年度
学会賞報告

の比較から」に掲載しておりますので、そちらをご覧くださいませう。



授賞式スナップ (左：西島さん、右：山川会長)

【委員長雑記】

学会賞選考委員長 藤井久美子 (東洋大学)

本会に学会賞が設置されてからすでに 6 年が経過した。そこで、今回はこれまでの歴史を簡単にたどってみたい。

自身は学会賞選考委員会が設置されてから委員となったので、設立までの議論等には加わっていないが、学会賞の目的としては、他学会にならって学会活動を通じて会員の研究を促進し、また、その中で優れたものを評価、発信するという事で、学会・会員双方が本会の目指す「もの言う」研究に積極的に参画できるように、ということが大きいと考える。

先にも述べたように、学会設立 20 年の節目となる 2018 年 6 月に開催された第 20 回大会から発表賞 (口頭発表部門・ポスター発表部門) の審査が開始された。発表賞の対象は若手会員 (大学 [院] 在籍者および卒業 [修了] 後 10 年に満たない者) である。第 20 回、第 21 回と受賞者が出て流れが生まれたが、第 22 回大会が開催された 2020 年はコロナ禍のために予稿集の刊行のみとなり、審査も行われなかった。翌 2021 年はオンラインではあるが大会が開催され、学会賞審査もオンラインで実施することで復活した。2021 年には、発表賞に加え優秀論文賞も発足した。学会誌『言語政策』に掲載された単著論文の中から優れたものを選考するというもので、こちらは全会員が対象となりうる。2021 年 3 月発行の第 17 号から初めての優秀論文賞が誕生した。2022 年になると 3 年ぶりに対面で大会が開催され、発表賞の審査もかつてと同様に対面で行われた。

2. 2022年度
学会賞報告

今年は本学会にとっては次の節目の年、25年目である。コロナ禍もようやく収束に向かいつつある中で、第25回大会は対面で開催され、かつてのような活気が戻ったように感じた。ただ、人文科学系の研究は、本学会だけでなく他学会でも見られるように、院生の減少や予算の縮小などで多くの課題を抱えた状態である。年代を問わず研究時間の確保も一層難しくなっているが、本会の会員の皆さまには、学会賞を一つの励みとして研究にこそしていただければと思う。(かく言う自身もその一人であるが…)

もう少しすれば、本会では理事選挙が行われ、各種委員会のメンバーも一新されることになるが、学会賞がこれからも充実、発展していくことを祈念して、現委員長として本稿をこれまでの総括としたい。

3. 若手研究者紹介

3. 若手研究者
紹介

専門家と非専門家との間のコミュニケーションの 言語問題とその対処策

寺井悠人(大阪大学大学院)

近年日本では、専門家と非専門家の間でコミュニケーションが円滑に図れないという言語問題についての議論が活発化している。医療、福祉、行政、情報通信などさまざまな分野で類似する問題が生じているとされ、その対処策の検討に際しては、専門家の側が情報の受け手となる非専門家に配慮し、コミュニケーションのあり方を工夫することの重要性が指摘されている。

こうした議論が活発化しているのは、日本に限ったことではない。アメリカ合衆国やイギリスをはじめとする英語圏の国々では「plain English (平易な英語)」や「plain language (平易な言葉)」をキーワードとする議論・社会運動が過去70年以上にわたって展開され続けている。アメリカでは2010年に「Plain Writing Act of 2010 (平易な文書法)」という法律が成立・施行された。ここで「plain writing」は、「明確で簡潔で、よく整理され、主題や分野、対象とする読者に適したその他の最善事例に従った文書」と定義されており、各政府機関は書類や刊行物を「平易な言葉」で書くことが求められるようになった。施行10年が経過した今日、「平易な文書法」がアメリカにおける健康情報格差の是正に役立っていること、また老若男女／専門家と非専門家／英語を第一言

3. 若手研究者 紹介

語とする者と第二言語とする者などなど、全ての人々の文書理解度の向上に役立っていることを示す証拠が増えていることが報告されている。

英語圏の国々におけるこうした法律やその社会的影響についての知見は、日本の言語問題や言語政策について検討する上でも示唆に富むのではと筆者は考えている。こうした背景から現在、英語圏の国々を中心に、専門家と非専門家との間のコミュニケーションの言語問題とその対処策について調査してきている。今後、実態を把握するための調査を行い、両者の比較したうえで考察することを計画しているところである。

4. 2023 年度特定課題研究会 について

4. 2023 年度 特定課題 研究会に ついて

2023 年度特定課題研究会として、2023 年 6 月の総会において、以下の 6 件が採択されましたので、ご報告します。

研究会名称: 国家・民族・言語の国際比較研究

代表者: 小田格 (中央大学)

参加者: 清沢紫織 (北海学園大学)、沓掛沙弥香 (東北学院大学)、高希麗 (後藤・安田記念東京都市研究所)、櫻間瑞希 (中央学院大学)、貞包和寛 (大妻女子大学)、渋谷謙次郎 (早稲田大学)、杉本篤史 (東京国際大学)、竹内大樹 (神戸大学大学院)

補助金額: 50,000 円

研究会名称: 多言語対応研究会

代表者: 白山利信 (筑波大学)

参加者: 岡戸浩子 (名城大学)、岡本能里子 (東京国際大学)、柿原武史 (関西学院大学)、高民定 (千葉大学)、今千春 (明海大学)、齋藤伸子 (桜美林大学)、藤井久美子 (東洋大学)、本田弘之 (北陸先端科学技術大学院大学)、松岡洋子 (岩手大学)、山川和彦 (麗澤大学)

補助金額: 申請なし

研究会名称: 2025 年日本国際博覧会における言語課題に関する研究

4. 2023年度
特定課題
研究会に
ついて

代表者:柿原武史(関西学院大学)

参加者:上村圭介(大東文化大学)、長谷川由起子(九州産業大学)、
藤井久美子(東洋大学)、山川和彦(麗澤大学)

補助金額:申請なし

研究会名称:空間デザインと言語政策

代表者:山川和彦(麗澤大学)

参加者:藤井久美子(東洋大)、石原昌英(琉球大)、村田和代(龍谷大)

補助金額:50,000円

研究会名称:言語と法に関する多角的研究一法の市民化をキーワード
にー

代表者:杉本篤史(東京国際大学)

参加者:橋内武(桃山学院大学)、岡本能里子(東京国際大学)、小田
格(中央大学)、札埜和男(龍谷大学)、韓娥凜(桃山学院大
学)、寺井悠人(大阪大学大学院)

補助金額:50,000円

研究会名称:多様な学びの場と当事者のエンパワメントにみる言語政策
課題

代表者:高民定(千葉大学)

参加者:高民定(千葉大学)、今千春(明海大学)、山川智子(文教大学)

補助金額:50,000円

以上

5. 会員著作物紹介

(2023年3月~2023年8月)

5. 会員著作物
紹介

松岡和美・内堀朝子編著(2023年3月)『手話言語学のトピック:基
礎から最前線へ』くろしお出版

5. 会員著作物
紹介

佐藤慎司・神吉宇一・奥野由紀子・三輪聖編著(2023年4月)『ことばの教育と平和 争い・隔たり・不公正を乗り越えるための理論と実践』明石書店

ボニー・ノートン著、中山亜紀子・福永淳・米本和弘訳(2023年4月)『アイデンティティと言語学習 ジェンダー・エスニシティ・教育をめぐる広がる地平』明石書店

村田和代(2023年4月)『優しいコミュニケーション 「思いやり」の言語学 (岩波新書 新赤版 1971)』岩波書店

西山教行、大山万容(編)(2023年4月)『複言語教育の探究と実践』くろしお出版

小川誉子美(2023年6月)『開国前夜、日欧をつないだのは漢字だった 東西交流と日本語との出会い』ひつじ書房

島津拓(2023年6月)『戦前戦中期の国際文化事業と、その戦後期への影響 国際文化交流・日本語教育・留学生教育』現代図書

佐野愛子・佐々木倫子・田中瑞穂編(2023年7月)『日本手話で学びたい!』ひつじ書房

明晴学園手話科(小学部・中学部)・狩野桂子・森田明・バイリンガル=バイカルチュラルろう教育センター編(2023年8月)『手話に関心があるすべての人のための 知る・学ぶ・教える 日本手話-明晴学園メソッド』学事出版

※会員著作物の情報提供を随時募集しています。特に、辞典類など共著者が多い場合は見逃している可能性があります。過去の著作物でも2020年1月以降のもので未掲載の場合は、追補していきたいと思っておりますので、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

なお、対象は単著・共著を問わず、単行本、定期刊行物(学会誌や大学紀要論文を除く)、翻訳書などです。

情報提供先: JALP 広報委員会 jalp.pr@jalp.sakura.ne.jp

6. 事務局からのお知らせ

6. 事務局から のお知らせ

<2023 年度年会費について>

2023 年度の年会費につきましては、8 月上旬に会費納入のお願いを郵便にてお送りしています。もしお手許に届いていないという方は、学会事務局までご連絡ください。

<JALP 個人会員による次期理事・監事候補者の推薦投票について>

今年度は JALP 役員の改選年度に当たります。先日は JALP 役員選出のための会員調査へのご協力ありがとうございました。9 月には JALP 個人会員（学生会員は含みません）による次期理事・監事候補者の推薦投票を予定しておりますので、もれなくご投票ください。詳細は学会メーリングリストにてお知らせいたします。

<2024 年特定課題研究会の募集について>

2024 年度開設の特定課題研究会を募集いたします。詳細につきましては、11 月ごろに学会メーリングリストおよびウェブサイトにてお知らせする予定です。

※JALP 特別企画 言語政策と「空間デザイン」シンポジウムのお知らせ

2023 年 6 月に開催しました日本言語政策学会研究大会に引き続き、言語政策と「空間デザイン」のシンポジウムを下記のように開催いたします。皆様のご参加お待ちしております。

本シンポジウムでは、「空間」「言語環境」をキーワードに、基調講演とそれに続くパネルディスカッションを通して都市計画、都市デザイン、都市政策、言語政策、社会言語学といった多様な領域から話題提供を行います。そこから浮かび上がる新たな視点について議論し、多様な人々が集う空間の創発には、どのような複合的な研究領域間の連携や視座が重要であるのかについて共に考える場を提供できれば幸いです。

日時:9 月 24 日 13:30~16:30

6. 事務局から
のお知らせ

会場: 龍谷大学深草キャンパス 22号館301教室 https://www.ryukoku.ac.jp/about/campus_traffic/fukakusa.html

参加費無料(申込不要)

龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター(LORC)・日本語政策学会(JALP)共催

プログラム

総合司会 村田和代 (龍谷大学教授・日本語政策学会理事)

13:30 挨拶 日本語政策学会会長 山川和彦 (麗澤大学教授)

13:45~14:30 基調講演「都市空間に表出される言語環境」服部圭郎 (龍谷大学教授)

(休憩)

14:45~16:20 パネルディスカッション

パネリストより話題提供(各15分程度)

「空間体験と言語環境」阿部大輔 (龍谷大学教授・LORCセンター長)

「地域言語と観光空間」柿原武史 (関西学院大学教授)

「多様性に拓かれた空間デザイン」岡本能里子 (東京国際大学教授・日本語政策学会副会長)

ディスカッサント 服部圭郎

ファシリテーター 村田和代

16:20~16:30 まとめと閉会の辞 山川和彦

問い合わせ先: 日本語政策学会事務局 jalp.jimu@gmail.com

編集後記

ニュースレター37号をお届けします。今回も皆さまのおかげで充実した内容とすることができました。寄稿と情報提供にご協力くださった皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。

まだまだ暑い日が続くようです。どうか皆さまご自愛ください。

(広報委員 AS)